

ヨーロッパサッカーチームにおける多言語主義について

—— スペインサッカーリーグにおける日本人選手を中心に ——

下 田 幸 男

要 旨

サッカーは世界各国で行われているスポーツである。特にヨーロッパのサッカー強豪国には、世界中から一流の才能が集まり、チーム内競争や熾烈なライバル関係が非常に高いレベルで繰り広げられている。そんな欧州のエリート集団の中にあつて、頭角を現そうとしている類まれな才能を持った日本人選手も少なくない。立派な成績を収める選手が増える一方で、言葉や文化への適応の難しさから、潜在能力を十分に発揮できない選手もいる。このような問題があるにもかかわらず、日本人選手が海外のチームで直面する言語習得の問題を詳細に取り上げた研究はまだほとんどない。本稿では、特にスペインリーグに焦点を当て、国内外のメディアから得た知見をもとに、日本で最も才能のある選手たちが潜在能力を十分に発揮する上で直面する困難を明らかにし、状況を改善する方法を探る。

キーワード：サッカー、日本人サッカー選手、言語、外国語、スペイン

はじめに

今世紀に入り、日本人サッカー選手が海外に活躍場を求めるケースが非常に多くなつてきた¹⁾。そこで問題になるのが現地でのコミュニケーションである。多くの日本人選手が海外のリーグに進出一方で、言語の問題で監督や同僚から評価されず十分に活躍できない選手も多い。中田英寿氏、長友佑都氏、川島永嗣氏²⁾、吉田麻也氏などは、海外での語学の重要性について早い段階で認識し、各国語の勉強に励み、高い外国語運用能力を身に付けることができた。彼らが各チームで活躍できたのは、もちろん、サッカー選手としての能力の高さが前提ではあるが、高い語学力を習得できたことで、監督やチームスタッフ、チームメイトなどとのコミュニケーションが取れ、比較的スムーズにチームになじめたことが大きな成功の要因になっている³⁾。

しかし、残念なことに、日本人選手の現地でのコミュニケーションの問題、特に言語面に焦点を当てた研究はこれまでほとんどなされていない⁴⁾。本論は、このような実情を考慮して、まずヨーロッパの主なサッカー強豪国のチームが、現地の言語ができない選手に対してどのような対策をとり、今後どのような対策をとるべきかを論じた先行研究をいくつか紹介する。そして、日本を代表する選手たちが十分な活躍ができない「鬼門」であるスペインサッカーの文化的特徴と、現地や日本のメディアがどのように日本人選手を報道していたのかを、言語とコ

コミュニケーション面に限定して取り上げる。最後に、ヨーロッパ強豪国のチームがチーム内コミュニケーションの問題を重視し、言語系統的に近い言語圏の選手と獲得していることをデータに基づき検証する。

1. サッカーにおける言語の問題

サッカーは11人で行うチームスポーツである。パスの受け渡し、守備や攻撃のフォーメーション、ベンチやロッカールームでの監督やコーチからの指示、選手間での話し合いなど様々な場面でコミュニケーションは求められる。しっかりとコミュニケーションがとれなければ、監督、同僚、マスコミなどから信頼を得られることはなく、結果、試合や練習で孤立してしまうことになる。文化も言語も違う海外移籍となれば、コミュニケーションの問題は一層深刻となり、本来の実力を十分に発揮できなくなってしまう。

チームメイトといえども、みなポジションを奪い合うライバルである。そもそも外国人で言葉もできないよそ者に自分のポジションや親しい同僚のポジションを明け渡すようなことを平気でするはずがない。彼らも生活や人生がかかっているのである。さらに、日本と移籍先の国とのサッカーにおけるパワーバランスもある。ブラジル、スペイン、イタリア、ドイツのような強豪国は自国のサッカーに対するプライドが非常に高い。彼らが日本人のプレースタイルに合わせてくるなんてことはまずないと考えた方がいいだろう。だからこそ、チームに溶け込む姿勢や現地の言語を習得する努力が必ず必要となる⁵⁾。

2. 多言語チームにおけるコミュニケーション

サッカーのようなチームスポーツでは常にコミュニケーションの問題が発生する。ましてや、言語も通じない他国でプレーする外国人選手にとっては監督やコーチ、選手間で意思の疎通ができないというのは死活問題である。日本選手が目指すヨーロッパのような多言語社会ではこうした問題について多くの先行研究があるのだが、残念ながら、サッカーではあまり多くの研究がなされてこなかった⁶⁾。そもそもヨーロッパのように、プロサッカーチームが100年以上の歴史を持つヨーロッパでさえも、「サッカーには言葉はいらない⁷⁾」というような論調が多くを占めており、チーム自体も外国人選手の受け入れのための言語や文化面でのサポートについては力を入れてこなかった (Siebetcheu 2014: 155)。

さらに、選手の外国チームにおける言語の問題について、上記のような先入観やサポート不足もあり、あまり注目されることはなかった⁸⁾。このような言語の問題は、選手自身の問題として取り上げられることはあっても、チーム全体の問題として扱われることはなく、選手本人も外国語が理解できないことで不平を言ったり、コミュニケーションに問題あること自体認め

ようとはしてこなかった。監督やコーチもこの問題を重要視せず、自らが外国人選手に歩み寄りその言語を学ぶような姿勢を見せることもあまりなかった (Lavric and Steiner 2017: 60)。

Maderer, et al. (2014) の論文は、ヨーロッパのプロサッカーチームの文化的多様性とチームパフォーマンスの関係を分析したものだ。著者らは、「構造」-「リーダーシップ」-「パフォーマンスモデル」(a structure-leadership-performance model) に基づいて、5つの大きなヨーロッパサッカーリーグ(イングランド、フランス、ドイツ、イタリア、スペイン)の98クラブの2483人の選手のアーカイブデータを用いて、様々な文化的要因がチーム成功にどのような影響を与えるかを検証した。その結果、チームの文化的多様性とコーチの異文化経験の不足がチームパフォーマンスにマイナスの効果を持つことが分かり、多文化チームに関する研究やサッカーチームのマネージメントに対して問題解決のための示唆を与えている。

この論文中で2012年にドイツのフランクフルトに在籍していた乾氏のKicker誌(20.07.2012.)のインタビューが引用されている：

I can't speak English at all, I understand some German but find it hard to communicate (…). When I played for Bochum, Kagawa [at that time playing for the neighboring team of Borussia Dortmund] and I often went to German classes together. Recently, however, I did not have this opportunity and I don't have a teacher anymore (…). I don't understand everything because of the language barrier (…). Misunderstandings always happen from time to time.

外国人選手が現地の言語を理解できない場合は、語学サポートが不可欠である。その欠如は戦術理解などに支障をきたし、結果的に選手の十分なパフォーマンスが阻害される可能性がある。論文では、選手やコーチが複数の言語を使いこなすスキルを持っていると、文化的に多様なチームの結束が高まり、成功に導く可能性が高くなることをデータに基づき明らかにしている。

Siebetcheu (2014: 163) では、イタリアのプロサッカーチームに所属する外国人選手の言語の問題について扱っており、彼らが直面する課題として、チームが彼らに言語面でのサポートを十分にしていない点について指摘している。論文中では選手がチームに合流した初めの数か月はこうした問題を解決するために様々サポートを提供する必要性についても触れている。そして、このような言語や文化的問題の解決のためにクラブがとるべき4つの提案をしている。

1. 様々な国籍の選手がいるチームはチーム内でのコミュニケーション管理を行う。
2. 新規の選手やコーチの言語的、文化的な障壁を解決する。
3. 所属チームや街などの言語や文化に適應するための期間は選手をサポートする。

4. 言語チューターがサッカー用語などを教える。

しかし、このようなことができるのは比較的裕福なチームであって、小規模なチームはそこまで人員を割けないのが現状のようだ (Siebetchu 2014: 155)。

スペインでもスポーツ通訳の役割は軽視されてきた。スペインでは、スポーツ専門の通訳が非常に少なく、さらに、そのような専門的な通訳を養成する機関もほとんどないという (Lorca Antón 2015)。実際に、日本人としてはじめてスペインのプロサッカーリーグに挑戦した城彰二氏も言語面でのサポート不足を経験している。当時、所属したバジャドリードは2000年当時1部リーグに所属していたが、財政難であったため通訳はつけてもらえず、城氏自身が個人的に通訳を雇っていたという (「城彰二 JO チャンネル」)。

Szymanski (2021) では、多言語および多文化の背景を持つ監督、コーチが率いるチームは、単一の文化的背景を持つ監督、コーチが率いるチームよりも、より高いパフォーマンスを示す傾向があるとしている。さらに、異なる文化的背景を持つ選手がチームにいる場合、多言語および多文化の監督、コーチの方がより効果的に彼らを統合することも示している。

さらに興味深いことに、コーチが多言語でコミュニケーションできると、プロの通訳者を使用したり、他のチームメンバーに翻訳を頼ったりするよりも、より効果的に選手と意思疎通できることを示しており、この調査結果は、多文化社会における互いの意思疎通が、翻訳中に失われる可能性があることも示している。

他にも、多言語のチームにおいては、チームや試合に関わる全ての人が言語や文化的な問題を解決するために様々な努力 (通訳の雇用、自らの外国語習得、外国人選手への語学習得のための援助など) が必要であることをインタビューを通じて検証した Lavric (2008, 2020), Chovanec (2009) などがある⁹⁾。

では、上述のような通訳などの言語的なサポートがあれば問題は解決するのだろうか。選手の中には言語習得を苦手とし、積極的に学ぼうとしない選手もいる (Lavric 2008: 386)。そういった選手は、サッカー強豪国のリーグでは自身の十分に実力を発揮するのは難しいかもしれない。もちろん、移籍した当初であれば、チームがこのようなサポートを提供するのは当然であろうし、監督やチーム関係者もチームにフィットするにはある程度の時間がかかるのは承知している。では実際に、強豪国の監督やコーチは、この言語問題に関してどのように考えているのだろうか。

カイ・サワベ (2014) は「外国でプレーする日本人選手に言葉はどこまで必要か」というタイトルの記事で、欧州でプレーした日本人選手と監督やチームメイトにインタビューしている。ドイツのバイエルン・ミュンヘンやホッヘンハイムに所属していた宇佐美氏のケースは、語学的重要性を示した例として示唆的である。ドイツのホッヘンハイムで監督していたフラン

ク・クラマーは、新監督として就任した後、最初の試合まで3日間しかなかった状況で、自分の指示を理解しているのかわからない宇佐美選手ではなく、ドイツ語を解する選手を試合に起用した。その後、その選手が試合でいいプレーをしたため、その後の宇佐美選手の出場機会がなくなってしまった。

この時点で宇佐美選手は、試合やトレーニングでは通訳なしで行う程度のドイツ語は理解していたようなのだが、ドイツ語での複雑な戦術理解は十分でなく、消極的な姿勢も相まってその後の出場機会の喪失につながってしまったという。つまり、ほぼ実力が拮抗しているのであれば、現地の言葉を理解している選手を選ぶという実例である。

記事によると、イビチャ・オシム(元日本代表監督)などの欧州で活躍する監督たちは、ピッチ外での言葉の重要性と、できれば通訳はいない方がいいという点に関しては共通の意見を持っているという。つまり、ロッカールームや、食事会やパーティーなどでチームに溶け込むにはお互いの言葉の理解が重要であり、その場合、通訳などの第三者が選手の周りにずっといると、間接的なコミュニケーションによるネガティブな影響が出る可能性を危惧しているのである(Lavric 2008: 386)。

ではどの程度言語の習得を待ってくれるのか。記事では、移籍後6か月でピッチ上での説明を理解でき、1年後にはロッカールームでの戦術的なことなど込み入った話が理解でき、2年後には現地語を正しく話せるレベルまでになることが望ましいという¹⁰⁾。個人的な感想になるが、ヨーロッパの言語とは発音も文法も全く異なる言語を母語とする外国人、特に外国語習得が苦手な日本人選手には非常に高いハードルだろう¹¹⁾。

3. スペインにおけるスペイン語の「強要」

多くの日本人選手が海外のチームに移籍するようになり、語学の重要性の認識も高まってきた。実際、イタリアで活躍した中田英寿氏をはじめ、現地の言葉ができる選手が多くなってきた。英語圏以外ではドイツでの日本人選手の活躍が顕著だ¹²⁾。しかし、過去に多くの日本を代表する選手を送り込んでいるにもかかわらず、そのほとんどが成功とは言えない結果に終わってしまう国がある。スペインである。

現地のスポーツ新聞 As 紙に掲載された Jiménez (2018) の記事では、「バイルや乾など La Liga でスペイン語が落第の選手たち〈Bale, Inui y otros jugadores con el castellano suspenso en La Liga〉¹³⁾」という見出しで、2018年当時、スペインのチームに所属していたバイル選手や日本人の乾選手や柴崎選手の語学力の問題について指摘している。ウェールズ人であるバイル選手については、「5年もスペインでプレーしているのに記者会見やインタビューでスペイン語で話そうとしない」と批判。乾選手に関しては、「彼は内気で言語を学ぶのが苦手なようだ」と当時の所属チームの監督の談話を引用し、エイバルに所属して3シーズン目であるにもかか

ならず、まだ通訳をつけていることを批判的にコメントしている。柴崎選手にも、「彼は所属チームでは唯一の外国人選手ではないが、彼だけが、スペイン語がまったく話せない。」と手厳しい。ほかにもさまざまな外国人選手についてもスペイン語の能力不足についてコメントしており、スペインのジャーナリストたちがいかに外国人選手にスペイン語を「強要」しているかがうかがわれる¹⁴⁾。

英国人の William (2017) の記事「ラ・リーガの外国人選手は、スペイン語をマスターするまでは格好の標的である〈La Liga's foreign players are easy targets until they master the Spanish language〉¹⁵⁾」で、スペインサッカーにおけるスペイン語の「強要」について詳細に述べている。例として、スペインではベイル（ウェールズ人）、クロース（ドイツ人）、ベッカム（イングランド人）のようなスター選手（レアル・マドリード所属）が、スペイン語を話せないことや、言語を学ぶために十分な努力をしていないことを理由に強烈的な批判にさらされていると告発している。他のヨーロッパの国々ではこのような言語の「強要」は見られないという。

これらの選手は確かにスペイン語が「饒舌」であることはなかったが、選手としてはスペイン人選手以上に活躍し、レアル・マドリードをヨーロッパチャンピオンに導いた立役者たちである。スペイン語ができないことが、あたかも選手としての能力と等価のような扱いをするべきではないと、記事では主張している¹⁶⁾。

では、このような言語習得が当然とされる厳しい環境の中で日本人選手はこれまでどのような扱いを受けてきたのか、スペインのスポーツ新聞の記事や各選手のコメントなどから紹介する。

4. 日本人選手のスペイン挑戦

日本人として初めてスペインリーグに挑戦したのは、先ほども述べた城彰二氏である。2000年にスペインのバジャドリードに移籍した城氏は半年の在籍で15試合に出場し2ゴールをマークした。城氏のYouTubeチャンネルでは、スペインでのサッカーがいかに当時の日本とは違うか、言語面でどのような苦労を経験したかを語っている。言語に関しては、言語の習得の重要性について、

「ボールは友だちだから、言葉はいらない、ボールだけで十分だ、なんていう人いるけど、それは絶対に嘘だ！（言葉で）コミュニケーションができなければサッカーなんてできない！」と熱く語っている（城彰二「JOチャンネル『【スペイン行きが決まった裏話】』」2021/03/09. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=Lj2uQctggTo&t=626s>）。スペイン語を真剣に学び、間違ってもスペイン語で積極的にコミュニケーションをとるようになったことで、練習や試合でもパスが来るようになり、監督からの評価も上がり、選手の信頼を得られるようになったという。海外移籍を考えている選手には現地の言葉や英語をしっかりと学んでおくように

とアドバイスしている¹⁷⁾。

その後、日本代表を経験した実績も能力も十分にある選手たちがスペインのチームに挑戦した。西澤明訓氏も日本代表を経験し、日本でのストライカーとしての実績も十分であった。2000年にセレッソ大阪からRCDエスパニョールにレンタル移籍したが、8試合のみの出場得点はなし。スペインではまったく活躍できなかった。

小宮良之(2020)¹⁸⁾は、当時、西澤選手と同僚だったスペイン代表も経験しているタムード氏にインタビューし、西澤選手についてのアドバイスを求めている。以下抜粋：

「やはり、問題はコミュニケーションだろう。言葉の壁は大きい。ピッチでお互いが伝えたいことをかわせないのは、大きな障害だよ。アキはシャイな性格のようだが、スペイン語を学んでもらうしかない。自分たちはファミリーで、アキが困っていたら、すぐに助ける。だからこそ、まずは言葉を学んでほしいんだ」

「アキはスペイン語を話せなくても、もっと選手と一緒に過ごすべきだっただろう。実力はあったが、チームにフィットせず、出場時間は増えるどころか減ってしまい、終盤は完全に戦力外だった。日本人選手はコミュニケーション力で問題があるのではないか」

これは一選手の西澤選手への意見であって、当然、別の角度からは違った見方もあったはずだ。しかし、まずは同僚の信頼を勝ち取り、チームや文化に適応する姿勢を見せなければ同僚選手からの協力を得るのは難しいことを、このコメントは示唆している。

大久保嘉人氏もまたセレッソ大阪や日本代表での活躍が認められ、2005年にスペインのRCDマジョルカにレンタル移籍した。1年半の滞在で39試合5得点6アシストの活躍を見せたが、彼自身の実力を十分に発揮できたとはいえなかった。チームから半年間通訳をつけてもらいスペイン語の勉強にも励んだ結果、半年後にはある程度意思の疎通ができるようになり通訳なしで選手や監督とコミュニケーションをとるようになったという。

とはいえ、現地のジャーナリストは当時の大久保氏に手厳しい。2005年7月21日付のDiario de Mallorca紙によると¹⁹⁾、彼は内向的で、(半年経過しても)スペイン語ができないだけでなく、チームメイトとの会話も満足にできないと述べている。As紙の2019年の記事では当時の大久保氏の退団には言語の問題があったとして、練習でさえも傍らに通訳をつけ、チームや監督のからの指示も通訳に頼っていたことが批判的に取り上げられている²⁰⁾。

一般的に考えれば、スペイン語がまったく理解できない大久保選手に半年間通訳をつけるのは当然である。大久保氏も語学学校に通うなどしてスペイン語を学ぶ姿勢を示し、選手との交流も活発にしていたという²¹⁾。しかし、スペインでは(少なくともスペインのジャーナリストにとっては)、一選手に通訳が半年間も四六時中ついている光景はとても奇異に感じられたようだ。先にも述べたように、スペインでは半年もあればスペイン語ができるようになるは当然

で、それができないのであれば、個人の適応能力の問題として片付けられてしまう傾向にある。

この「適応能力」の問題が顕著に表れてしまったのが中村俊輔氏である。日本代表でも大活躍した中村氏はイタリアのレジーナ、スコットのセルティックでプレー。2009年に念願だったスペイン1部リーグのRCDエスパニョールに移籍。実力だけであれば、スペインでも十分に活躍できるはずであったが、約半年のみの在籍で13試合出場、0得点。十分な活躍ができずに2010年2月に古巣の横浜Fマリノスに復帰が決まった。

中村氏は鈴木啓太氏のYouTubeチャンネルで自身のスペイン時代について語っている（鈴木圭太「【分岐点】中村俊輔が語るベンチになった南アフリカW杯#4」YouTube. 2021/12/25. <https://www.youtube.com/watch?v=PMVxsPcCTsE&t=572s>）。イタリア、スコットランドと海外のチームで実績を残してきた中村氏だが、「スペインが一番難しくレベルが高かった」とコメント。さらに、「アジリティ、戦術理解度、フィジカル能力が高い。ずる賢く、ハードワークしなければならない。全部が備わっているリーグなので、日本人が適応するのはハードル高い」とも指摘している。一方で、「だからこそ成長でき、選手として得るものが多いリーグである」とも述べている。

では、現地の新聞各紙はどのように中村氏を伝えたのか。2010年2月2日付のEl Mundo紙では、中村氏自身がチームや異文化に適応する姿勢が欠けていると指摘している²²⁾。というのも、スペイン語も英語も話せないという彼の言葉の問題に直面したクラブは、スペイン語の先生と通訳を付けて毎日チームに同行させるという提案を示したが、中村氏はこれの提案を断ったと伝えている。さらに、あるチームメイトの発言として「チームや環境の適応にてこずっており、ロッカールームでは完全に孤立して親しい同僚もいない。話はしないが、スペイン語は理解しているようなので、なんとか身振りなどで意思の疎通は図っている」とコメントしている。

さらに大きな問題となったのが監督との関係だ。El País紙の2010年2月11日付の記事によると²³⁾、当時の監督であるポチェッティーノ氏も中村氏の問題については気にかけており、クラブが何度もスペイン語の先生をつけることを提案したのに中村氏がそれを断ったことや、言語を学ぼうとしない姿勢を批判的にコメントしている。

もちろん、マスコミのこういった指摘は、監督や同僚のコメントの一部を切り取って伝えている可能性もあり、必ずしも信憑性のあるものではない。スペインに限らず、ヨーロッパのマスコミは結果を出せない選手に対して非常に手厳しく、批判的に報道する傾向にある。事実、中村氏はスペイン語の勉強はしており、適応する努力はしていたようだ²⁴⁾。とはいえ、先述の西澤氏に対するコメントにもあるように、スペイン語ができることをアピールし、スペイン語を使ってもっと選手間の交流を図る必要はあったのかもしれない。

その後、家永2010-11（マジョルカ）、清武2016（セビージャ）、先述の乾2015～2020（エイ

バル、アラベス、ベティス)や柴崎 2018~2023 (2 部リーグ) など、日本代表の選手たちがスペインに挑戦したが、いずれも言語や適応の問題で本来の実力を発揮することなく、チームを去っている²⁵⁾。

清武選手に関して、彼は 2016 年にスペインの名門セビージャに移籍したのだが、半年の在籍で日本に帰国。ここでも一番大きな問題となったのが言語習得の問題である。ロシオ・ゲバラ (2016) の記事「清武がセビージャで起用されない理由。語学力の問題なのか。苦難続くもクラブは放出の考えなし (江間慎一郎訳)」では、セビージャの強化部門の関係者のコメントを引用し、試合に出場できず、チームにもなじめていない状況を報告している。

「…ただ、コミュニケーションが課題だった。できる限り早くスペイン語を覚えてもらわなくては。我々の言葉を話せれば、チームへの順応はうまくいくはずだ」

そして、日本人選手の特徴をよく理解している本記者は、清武の言語の問題について記事の中で次のようにコメントしている。

「スペイン語の授業において、フランス語、イタリア語、ポルトガル語、または英語を話せる者と一緒にアジア人が勉強しても、まったくついていけず置き去りにされるケースというのは多々あるが、清武も例に漏れずその壁にぶつかった。」

とはいえ、清武選手はスペイン語の学習には積極的であった。「彼は通訳をつけず、スペイン語をその身に浴びながら自分の物にしようと努めており (クラブはスペイン語の個人授業を受けさせている)、そしてチームに溶け込もうと奮闘している。」とコメントし、さらに、清武選手がスペイン語に習得に積極的であることについてチームをまとめるキャプテン、ビセンテ・イボラ選手のコメントを引用している。

「とても落ち着いているが、親しみが持てる奴だよ。皆と仲良くやっているし、スペイン語を話そうと努力していることも伝わってくる」

清武選手がセビージャを退団したのは言語だけの問題ではなかったようだが (EU 圏外の選手枠 3 名から押し出された形)、まだ十分に環境に慣れていない外国人選手をたった半年で戦力外にしてしまうのは、初期投資も含めあまりにも効率が悪く、拙速な放出だと思わざるを得ない。しかし、残念ながらスペインでは、助人として、即戦力として期待されている選手には多くの時間が与えられていないのが実状である²⁶⁾。

5. 日本の外国人選手

これまでは、海外の日本人の状況について見てきたが、日本における外国人の言語の問題はないのだろうか。これはヨーロッパや南米ではまずないだろうが、日本では3部リーグ（J3）でも、日本語に問題のある選手には通訳がつく。日本語の「強要」はなく、無理に日本語学校に行かせることもない²⁷⁾。日本人の一般認識として、外国人が短期間（半年や一年）で日本語を習得するのは難しいと考えていることもあるだろうが、わざわざ大金を払って日本に助人として来ている外国人選手にはそれ相応の活躍をしてほしいと考えており、そのためには通訳など言語的なサポートは不可欠であると認識しているからであろう。

例えば、鹿島アントラーズで活躍し、その後日本代表の監督になったジーコ氏は20年以上日本で活動しながら、メディアでは一切日本語を話さなかった。日常生活に支障をきたさない程度の日本語はできたようだが、メディアや日本人サポーターなどから日本語を強要するようなことはほとんどなかった。

現在も多くの外国人選手やスタッフがJリーグに所属しているが、その多くは通訳を介して日本人とコミュニケーションをとり、さらにその多くはサッカー以外の日常生活（家族や住居）もサポートしてもらっている。日本にいる外国人選手で日本語が堪能な選手（在日韓国朝鮮人は除く）はほとんどいないのが現状だ²⁸⁾。そういった意味でもスペインとはまさに対照的である。

6. 日本人選手共通の問題点

スペインが他国以上にスペイン語を外国人に要求する国であることはすでに述べたが、スペインにチャレンジする日本人選手たちの側に問題がなかったわけではない。日本代表の選手ともなると、それまでのキャリアではつねにチームの中心的な役割を担い、誰もが認めるエースであったに違いない。そのような選手がスペインに来ると、あたかも新人選手のように扱われ、自ら積極的に選手やスタッフにアプローチをしないと、誰もチームの一員として認めてくれない。通訳を入れてコミュニケーションを取ろうとしても、スペイン語で話そうとしなければ、練習でも試合でもパスを受け取ることもできない。これまでのキャリアやプライドなどもあり、下手に出ながら相手の懐に入るような行為は苦手としている人が多いだろう。よほど社交的で人とのコミュニケーションに長けている人でなければ、このような環境で成功するのは難しいのかもしれない。

スペインでは久保健英選手のように幼少期にスペインにわたり、スペイン語でのコミュニケーションに全く問題のないケースを除くと、成功といえる活躍をした選手はほほえない²⁹⁾。その大きな理由の一つが言語の習得であることはすでに述べた。では、どのような特徴をもった選手であれば日本人であってもスペインで活躍ができるのだろうか。実際に、スペインと比

較的似た環境であるイタリアで、実力を十二分に発揮し、活躍できた2選手の特徴について紹介する。

7. イタリアでの成功

イタリアもスペイン同様、人々はあまり外国語を得意とせず、観光地以外では英語ができる人はあまりいない³⁰⁾。そんな中で中田英寿氏のイタリアでの活躍は語学と切り離して語ることはできない。ペルージャやパルマなどで活躍した同氏はイタリアでの体験を語ったYouTubeで、イタリアにおける語学的重要性について以下のように述べている。

「言葉ができないと、どんなに結果を出してもチームの一員にはなれない。」

「言葉ができるというのは日常生活ができるだけでなく、味方(チームメイト)と口喧嘩できるようになる(しっかりコミュニケーションをとれるようになる)ことが一番大事で、どんなにプレーが上手くても、言葉ができなければチームメイトからボールは回ってこない。」

(中田英寿「20年目の旅」#2 | ボローニャ2019/12/01. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=HUHrT8E0X0g>)

さらに、そんなイタリア人気質についても言及している。

「イタリア人は他言語をほとんど受け入れず、英語を話す人は圧倒的に少ない。イタリア語ができなければ彼らの仲間には入れない。」

このような環境であることを日本にいるときから意識していた同氏は、語学的重要性について雑誌のインタビューで次のように述べている。

「サッカーに集中できる環境を作ることができるかということが大事でしたから、その環境を作る上で、イタリア語を話せるようになることは、非常に重要なことでした。」

「(日本の)ベルマーレ時代から(イタリア語を)勉強し始めてましたし、イタリアに来てからもかなり意識的に勉強したので、ペルージャ時代には監督やチームメイトとのコミュニケーションでは、もうほとんど問題なかったと思います。」

岩本義弘「中田英寿『やっぱり僕はイタリアが好きです』『サッカーキング』(2023年12月11日取得 <https://www.soccer-king.jp/news/japan/20180913/829773.html>2018/09/13)

もう一人、イタリアの名門インテル・ミラノで活躍した長友佑都氏は、中田氏とは異なり、語学に長けていたというわけではなかったようだが、コミュニケーション能力に関して卓越した才能を持っていたという。Football Channelにおける神尾光巨の記事によると、長友氏は7年半もイタリアの1部リーグ、それもビッグクラブであるインテルで活躍した実績は間違いなく成功であり、その理由について以下のように述べている。

「通訳は置かず、食事では選手の輪の中に積極的に入る。相手の言うことを解するということのみならず、自分を理解してもらおうとするための手段。過去の日本人選手には、中田英寿のように語学を磨いて飛び込んだものもいれば、シャイな人という壁が越えられなかったものもいた。一方で長友は、捨て身でコミュニケーションをとる方を選ぶ。あまりにも陽気な様から、明るいノリで知られるナポリ人ふうにな『ナガティエッロ』というあだ名さえつけられていたという。」

神尾光巨「10年、長友佑都。低評価を覆して生き残った男の真実。批判の連続から、愛されるまでの物語」『Football Channel』2019/08/01.

さらに、元チームメイトのイタリア人MF ジュゼッペ・コルッチは、同氏がチームで評価されたことについて「そんなの簡単だ。ナガトモは日本人なんかじゃない。あれはラテンの血が混ざってる。むしろイタリア人だよ」とまで述べているという。

(豊福晋「〈監督とチームメイトに聞く〉長友は世界一のサイドバックになれるのか?」『Number Web』2011/04/05 (2023年12月11日取得 <https://number.bunshun.jp/articles/-/105946>))

中田氏と長友氏は対照的ではあるが、イタリアのような環境で成功するための要因を教えてください。中田氏は知性で、長友氏は人間性で難題である現地の人々のコミュニケーション問題を克服し、イタリアで成功を収めることができた。

8. 言語的考察

国内外のメディアでの日本人選手を扱った記事などを通じて、日本人サッカー選手がスペインで十分な実力を発揮できない理由の一つが語学の問題であることについて述べてきた。言語の問題があるとしても、スペイン語はそんなに日本人にとって習得が難しい言語なのだろうか。

発音面に関しては日本語とほぼ同じ5つの母音。文字もほぼラテン文字(ローマ字)の読み方で文字の問題はほとんどない。しかし、動詞が人称や時制によっていくつも変化し、名詞は男性名詞、女性名詞にわかれ、冠詞や形容詞もそのジェンダーに応じて変わる。比較的早口で

リスニングには時間がかかるが、相手に言いたいことを伝えるだけであれば発音面に関してはほぼ問題ない。少なくとも同時に学べば英語よりは学びやすい言語である³¹⁾。とはいえ、日本語とは文法が全く異なる言語であることに違いはなく、日本人が短時間で習得できる言語ではない。

ヨーロッパにおけるサッカー強豪国の公用語は系統的に大きく二種類の言語群に分けることができる。スペイン語、ポルトガル語、イタリア語、フランス語はロマンス諸語と呼ばれ、ラテン語の口語である俗ラテン語に起源をもつ言語の総称である。これらの言語はラテン語から派生し、語彙や文法などが似通った姉妹語である。一方で、英語、ドイツ語、オランダ語、フラマン語（主にベルギー）はゲルマン語派、その中でも西ゲルマン語群に属する言語で、こちらもまた比較的系統の似た言語群である。

2023年時点で最も日本人選手が所属しているヨーロッパのリーグはドイツのブンデスリーガだ。ドイツでももちろんドイツ語の習得は重要だが、英語圏やドイツ語圏のようなゲルマン語派、その中でも西ゲルマン語群に属する言語圏であれば、英語である程度コミュニケーションをとることができる。ドイツやオランダ、ベルギーで日本人選手の言語の問題があまり取り上げられないのはこういった事情もあるからである（注12参照）。

一方で、スペイン語などのロマンス諸語は、ほとんどの日本人にとって初修言語であり、語彙も文法もまったくの未知である。さらに、ロマンス語圏であるスペイン、フランス、イタリアの人々は英語があまり得意ではない（注16, 30参照）。日本人にとって未知の言語であり、英語も通じないのであればチームに適應するのは自ずと難しくなる。スペインほどではないが、フランス、イタリアでも多くの日本人選手が在籍したが、その多くは決し成功とはいえない結果となっている³²⁾。

こういった言語の問題はヨーロッパの各国リーグにおける外国人の国籍にも表れている³³⁾。スペイン1部リーグにおいて、18-19シーズンから23-24シーズンにかけて最も所属人数が多い外国人の国籍は、上位からアルゼンチン、ブラジル、フランス、ウルグアイ、ポルトガルの5か国である。いうまでもなく、これらはロマンス諸語を公用語としている国々である。一方で、スペインの1部リーグにおいて、イングランドの選手は09-10から約10年間で0人である（その後、18-19シーズンから5シーズン連続で1名のみ）。ドイツ人も外国人選手の中ではマイノリティーで毎シーズン3~4名で推移している。イタリアの1部リーグもフランス、ブラジル、アルゼンチン、スペインなどが上位にきている。フランスの1部リーグはモロッコ、セネガル、コートジボアール、アルジェリアなどアフリカ国籍（フランス語圏）が多いのが特徴だ。ドイツ1部リーグのブンデスリーガでは隣国のフランス、オーストリア、オランダ、スイス、デンマークなどが多い。では、イングランドのプレミアリーグではどうか。イングランドは英語が公用語ということもあり、言語の影響はほとんど見られない。ここ5シーズンを見ると、ブラジル、フランス、ポルトガル、スペイン、アイルランド、スコットランドが上位を

占めている³⁴⁾。

このようにデータを見ると、ヨーロッパのサッカー強豪国のリーグでは、各チームは言語的なコミュニケーションの問題がより少ない国や地域の選手を獲得する傾向にあるようだ。先ほど述べたロマンス諸語が公用語の国（スペイン、フランス、イタリア、ポルトガルなど）と西ゲルマン語群が公用語の国（ドイツ、イングランド、オランダなど）のチームは、それぞれ言語的に近い国の選手が大半を占めている。つまり、たとえ外国人であっても、その多くは半年もすればその国や地域の言語を習得可能ということだ。2章での述べた宇佐美選手のケースのように、実力が同じであれば言語理解により長けた選手が起用されることを前提とすれば、ヨーロッパの言語の習得に何年もかかる日本人にとっては非常に不利な状況である。

まとめ

ヨーロッパのサッカーチーム、特にサッカー強豪国であるスペイン、イタリア、ドイツ、フランス、イングランドには多くの外国人選手がプレーしている。その中には現地の言葉を理解できずチームに適応できない選手たちが多く存在する。先行研究でも見てきたように、サッカー先進国とされているこれらの国々でも、外国人選手に対する言語的なサポートが十分に行われているとはいえない状況にある。本論は、日本代表する選手たちの前に壁のように立ちふさがってきたスペインリーグを中心に、言語面で選手たちがどのような問題を抱えていたのかを、国内外の記事を参考に紹介した。

そこでわかったのは、スペインにおいて日本人選手が不利になるような状況がいくつも存在していたことだ。一般的にスポーツ紙の記事には、活躍できないチームや選手に対して批判的な論調がしばしば見受けられる。しかし、スペインにおける言語面での要求は他国ではあまり見られないほど強い傾向にある。まず、苦手意識から英語をあまり使おうとはせず、英語でのコミュニケーションを嫌う傾向にあること。多くの日本人にとってスペイン語は初修言語で、初歩の初歩からスペイン語を学ばなければいけないこと。スペインで活躍する外国人選手の多くはロマンス諸語を公用語とする国からの選手が多く、スペイン語の習得にはあまり時間がかからないことから、日本人など言語系統的に異なる国からの選手たちの言語習得に時間がかかることが理解されていないこと、などである。

チームも、そういった日本人選手などに手厚い言語的サポートをするべきなのだが、助人としてきた外国人選手には即戦力が求められ、多くの時間が与えられてはいない(半年程度)。通訳の存在がコミュニケーションを阻害すると考えている監督・コーチなども多く、言語面での理解が進んでいない。

もちろん、その選手がスペイン語でコミュニケーションを取ろうとしなければ、ほかの選手からの信頼も得られず、徐々にチーム内で孤立してしまう。イタリアでの長友佑都氏のように

に、あるときは道化を演じ、相手の懐に入るような態度で接する気構えも時には必要だ。中田英寿氏が述べているように、日本代表選手だからといってもある程度は言葉で主張できなければチーム内での信頼は得られない。サッカーは世界スポーツである。もし本当に海外で活躍したいのであれば、英語も含めた外国語の習得こそが成功のための必須条件である。

注

- 1) 海外チームに所属していたのは、2002年の4日韓大会では23名中4名だったが、2014年ブラジル大会23名中12名、18年ロシア大会23名中15名、22年カタール大会26名中20名と右肩上がりである。
- 2) 川島永嗣氏は英語のみならず他のヨーロッパ言語にも精通しており『本当に「英語を話したい」キミへ』世界文化社を上梓している。
- 3) 吉田麻也氏は「お金かけずに英語ペラペラ『まずこれをやって』吉田麻也の必勝勉強法」朝日新聞2017年7月28日付の記事の中で、「子どもから『サッカー選手になるにはどうしたらいいですか』と聞かれて、『英語をやろう』と答えていました。」「僕は英語を勉強したから、サッカーで活躍できたと思っている。サッカーを頑張る、プラス、自分の武器が必要になる。英語ができれば、シンプルに仕事の幅が広がる」と述べている。
- 4) 石川美紀子・北村雅則(2016, 2019)はクロアチアのモンテネグロでプレーしている日本人選手にインタビューを行い、現地での異文化コミュニケーション能力をどのような過程で身に着けたかを検証している。
- 5) 相撲界における外国人力士の日本語の習得については、宮崎里司2016『外国人力士はなぜ日本語がうまいのか』株式会社スマートゲートを参照。
- 6) サッカーチームではなく、多国籍企業や国際間ビジネスにおける言語の問題については次のような研究がある：Barner-Rasmussen and Aarnio, 2011; Harzing et al., 2011; Tenzer and Pudelko, 2015, 2017; Zander et al., 2011.
- 7) Kellermann - Koonen - van der Haagen (2006).
- 8) ルーマニア代表DFだったPredrag Spasić選手は、1990-1991シーズンにレアル・マドリッドに所属し、一年も経ずに戦力外になった。FCバルセロナ戦で「見事な」オウンゴール決めた選手として有名ではあるが、その退団の一番理由はスペイン語の問題であった。当時のスペインのスポーツ新聞Marcaに掲載された退団時のSpasić選手のコメントには「スペイン語がまったく理解できず、練習や試合での戦術理解についていけなかった。」とあった。スペインでは日本とは違って通訳がついて外国人をサポートする仕組みがないのかと不思議に思ったことが思い出される。
- 9) Innsbruck football research groupはEva Lavricを中心として言語とサッカーの関係について研究しているインスブルック大学の研究チームである。
- 10) 元川悦子「加速する若手の海外移籍——求められる語学力、適応力、メンタリティ。川島永嗣が指摘するのは『通訳が入ると…』」『Soccer Digest web』2021/01/24。(2023年12月11日取得<https://www.soccerdigestweb.com/news/detail/id=85343>)によると「普通の日本人選手が異国に渡って成功を掴むには、まずは言語を中心とした『適応力』と『コミュニケーション力』が不可欠なテーマになってくる。」としたうえで、「Jリーグにやってくる外国人選手の場合、通訳が身の回りの世話をするのは普通だが、日本人選手が欧州に赴く場合、通訳がつくケースはかなり少ない。1月にベルギー2部・ロンメルへ移籍した斉藤光毅は日本人通訳に生活面を含めたサポートをしてもらっているようだが、そういう環境は長くても半年くらい。その後は言葉、文化、習慣の違いにひとりで向き合わなければいけない。そのハードルをどう超えていくかが肝心なのだ。」と述べている。
- 11) 島崎英純氏「ブンデスで戦う日本人選手の語学力は？ ドイツ在住記者が見た、知られざる一面」『Sportsnavi web』2020/09/19。(2023年12月11日取得<https://sports.yahoo.co.jp/column/>)

detail/202009180008-spnavi) では、ドイツで長年プレーしている長谷部氏のドイツ語能力に言及している。以下抜粋：

普段のゲームでドイツの地元記者数十人に囲まれながら、ドイツ語で対応する長谷部選手の語学力は、やはり素晴らしいです。僕自身、その姿に見とれてしまうくらいなのですが、そんな彼にも悩みはあるそうです。以前、長谷部選手と何気なく話をしていたら、彼はこんなことを言っていました。「今はあらためて、『もっとちゃんとドイツ語を勉強していれば良かったな』と思っている。ドイツには名詞に性があって、その性ごとに冠詞がつくんだけど、正直なところ、その冠詞をつけなくてもドイツ語はしゃべれる。でもネーティブがそれを聞くと、やっぱり、その言葉は拙く感じてしまうんだよね」

長谷部選手の言う『名詞の性』とは男性名詞、女性名詞、中性名詞のことで、ドイツ語ではそれぞれの名詞につく冠詞が決まっています。でも、これがややこしい。当然、僕も『名詞の性』には非常に苦戦しているのですが、長谷部選手の場合は、もっと高いレベルでその悩みに直面している様子です。

- 12) ドイツで日本人選手が活躍できる理由については、大久保尚文「日本人がドイツで活躍できる理由…規律や戦術を好む国民性」『スポニチアネックス』2015/11/10 (2023年12月11日取得 <https://www.sponichi.co.jp/soccer/news/2015/11/10/kiji/K20151110011482700.html>), 元川悦子「日本代表・遠藤航『世界で活躍できる人材の条件』ドイツで『日本人らしさ』を大切にすのワケ」『東洋経済 ONLINE』2022/03/17. (2023年12月11日取得 <https://toyokeizai.net/articles/-/538819>), 船木渉「だから遠藤航をキャプテンに選んだ。ドイツ語を話せない主将はなぜ絶対的な信頼を得たのか?」『Football Channel』2022/07/03. (2023年12月11日取得 <https://www.footballchannel.jp/2022/07/04/post467955/>) などがある。
- 13) Jiménez, Mayca “Bale, Inui y otros jugadores con el castellano suspenso en La Liga”, *As*, actualizado a 26/02/2018. (2023年12月11日取得 https://as.com/futbol/2018/02/23/primera/1519405582_874275.html)
- 14) Statista (<https://www.statista.com/>) の2023年の調査によると、世界のスペイン語話者の数は約5億6千万人いるとされている。この数字は英語、中国、ヒンディー語に続く世界第4位である。英語圏と同様に、大言語圏の話者は外国語を学ぶ意欲などが比較的低いとされている。
- 15) Williams, Craig “La Liga’s Foreign Players Are Easy Targets Until They Master The Spanish Language”, *The Guardian Online*, 17/03/2017. (2023年12月11日取得 <https://www.theguardian.com/football/in-bed-with-maradona/2017/mar/17/la-liga-spain-beckham-bale-kroos-real-madrid-language>)
- 16) 英語の能力に関して、スペインはヨーロッパ35か国中25位とあまり高くはない (EF English Proficiency Index 2022)。さらに、Eurostat の2016年の調査によると、45.8%のスペイン人が外国語がまったくできない。この数字は2007年の46.6%からほとんど変わっていない。ちなみに、イギリスは2016年の調査では65.4%の人が外国語ができない (ヨーロッパ最下位)。
- 17) この城氏とまったく同じ意見をスペイン2部リーグのLléricaに半年間所属した安永氏もコメントしている。以下抜粋：
「よく、『サッカーはボール1つで通じ合える』みたいなことを言いますが、それはマラドーナなどのレジェンド級の選手が言う話であって、言葉ができない、まして全く異なる文化圏で育った日本人が海外に移籍した場合、言葉が分からないとうまくコミュニケーションをとれないと思います。相手の要求を理解し、自分の意思を伝えるためには言語でのコミュニケーションは大切です」
サカイク「ボールだけで通じ合えるなんて幻想！スペインでの経験から安永聡太郎が確信する、日本人が磨くべきスキル」2017/10/11。(2023年12月11日取得 <https://www.sakaiku.jp/column/interview/2017/013139.html#>)
- 18) 小宮良之「リリーガ挑戦の日本人の前に立ちはだかた壁。当然のことができなかった」『web Sportiva』2020/05/20. (2023年12月11日取得 https://sportiva.shueisha.co.jp/clm/football/wfootball/2020/05/20/post_97/)

- 19) *Diario de Mallorca* “El club prescind de traductor de Okubo para que se adapte” 21/07/05. (2023年12月11日取得 <https://www.diariodemallorca.es/deportes/2005/07/21/club-prescinde-traductor-okubo-adapte-4480710.html>)
- 20) Gabriel Forteza. “Kubo, el tercer japonés en la historia del Mallorca”, *As*, actualizado a 22/08/2019. (2023年12月11日取得 https://as.com/futbol/2019/08/22/primera/1566482765_664242.html)
- 21) 小宮良之 (2005) 『大久保嘉人の挑戦 —— Desafío』 角川書店。
- 22) Germán Aranda “Nakamura, ni dentro ni fuera”, *El Mundo* Actualizado a 02/02/2010. (2023年12月11日取 <https://www.elmundo.es/elmundo/2010/02/02/barcelona/1265107481.htm>)
- 23) *El País deportes* “El conflicto Nakamura”, 11/02/2010. (2023年12月11日取得 https://elpais.com/deportes/2010/02/11/actualidad/1265876519_850215.html)
- 24) 富福晋「必要とされなかったファンタジスタ = 中村俊輔がスペインで活躍できなかった理由」『Sports navi』 2010/03/05. (2023年12月11日取得 <https://sports.yahoo.co.jp/column/detail/201003010001-spnavi>)
- 25) Forteza, Gabriel “Tradición asiática en el Real Mallorca” *As*, 30/08/2021/. (2023年12月11日取得 https://as.com/futbol/2021/08/30/primera/1630351184_777922.html) では家永氏も言語と適応の問題で退団したとされている。
- 26) FC バルセロナのBチームに所属していた安部裕葵氏 (2019～2023) も言語習得の問題を抱えていたようだ。彼の場合は度重なる故障が退団の主な理由なのだが、現地のスポーツ紙である *Sport* の2022年2月3日付の記事では「新たな文化やサッカースタイルの違いに適応できなかったの確かである」, 「クラブは彼のためにスペイン語先生をつけるなどの努力を重ねたが、言語の壁は大きかった」と述べている。German Bona “El extraño caso de Hiroki Abe” *Sport*, 03/02/2022. (2023年12月11日取得 <https://www.sport.es/es/noticias/futbol-base/extrano-caso-hiroki-abe-13190778>)
- 27) 1995年の日本の文化庁の調査では、「外国人が日本語を話せるような教育を重視すべき」と答えた割合が35.5%, 「日本人が外国語を話せるような教育を重視すべき」と答えた割合が67.5%であった。
- 28) 過去にはバク・チソン氏, ノ・ジュンユン氏のように韓国人Jリーガーは比較的日本が堪能である。配偶者が日本人女性のリトバルスキー氏 (ドイツ), 日本語を公文式で学んだアマラオ氏 (ブラジル) や現在も熱心に日本語のドリルで学んでいるパトリック氏 (ブラジル) などは日本語に堪能である。
- 29) 乾氏は6シーズン (2015～2021) にわたってスペインの1部リーグで活躍したのだが (1部リーグ在籍6シーズンで合計16得点), 彼が所属したのはエイバルというバスク地方の小さなチームであった。バスクはほかのスペインの地域とは文化も言語も異なる地域で、外国人がスペイン語を話せなかったとしても、無下に扱うことはしない。監督もバスク人でアジア人である乾氏を偏見なく長い目で見守ってくれていた。José Luis Mendilibar, “Inui, un japonés en mi vida: obediente, educado, listo...” *Relevo*, 30/02/2022. (2023年12月11日取得 <https://www.relevo.com/futbol/taka-japones-equipo-20221130063952-nt.html>)
- 30) 英語の能力に関して、イタリアはヨーロッパ35か国中24位とあまり高くはない (EF English Proficiency Index 2022)。さらに、本国言語の保護や英語の氾濫に対する政策として与党が英語の使用に罰金刑を課す法案を提出する予定 (CNN「英語を使用した国民は罰金、与党が法案提出 イタリア」2023/04/03. 2023年12月11日取得 <https://www.cnn.co.jp/world/35202061.html>)。
- 31) Dilaの研究によると、日本語母語話者にとってスペイン語は習得の難易度では第II群に属しており、英語はより困難な第III群に属している。 <https://dila.co.jp/business/policy/>
- 32) 酒井宏樹氏はフランスの名門クラブ「マルセイユ」で5年間レギュラーとして活躍し、2019年には年間クラブMVPに選ばれた。
- 33) データは Transfer Market <https://www.transfermarkt.es/> による。
- 34) Jリーグ (1部～3部) における2023年の外国人選手の国籍は、ブラジル45名, 韓国10名, オランダ3名, ナイジェリア・タイ・デンマーク・ノルウェー・オーストラリア各2名である。1名の選手も含めると世界25か国, 83名の外国人選手が在籍しており、言語サポートが前提の日本では世界各国から選手を獲得している。

参考文献

- Baines R. (2013) "Translation, globalization and the elite migrant athlete", in *The Translator* 19/2, pp. 207-28.
- Barner-Rasmussen and Aarnio, Christoffer (2011) "Shifting the faultlines of language: A quantitative functional-level exploration of language use in MNC subsidiaries" in *Journal of World Business* 46.
- Chovanec, Jan and PodhornPolick, Alena (2009) Multilingualism in Football Teams: Methodology of Fieldwork, in *Language and Literature. European Landmarks of Identity*, 5 (1), pp. 186-196.
- Gazzola, Michele (2006) "Managing Multilingualism in the European Union: Language Policy Evaluation for the European Parliament", in *Language Policy* 5, pp. 393-417.
- Harzing, Anne-Wil et al. (2011) "Babel in business: The language barrier and its solutions in the HQ-subsubsidiary relationship" in *Journal of World Business* 46.
- Hofstede G (2001) *Cultures Consequences: Comparing Values, Behaviors, Institutions, and Organizations Across Nations*. (2nd ed.) Thousand Oaks, London: Sage Publications.
- 石川美紀子・北村雅則 (2016) 「異文化環境におけるコミュニケーションの実態調査——在モンテネグロ日本人サッカー選手へのインタビューから——」『南山大学紀要アカデミア人文・自然科学編』12, pp. 135-148.
- 石川美紀子・北村雅則 (2019) 「複数文化圏経験による相互文化的コミュニケーション能力向上の記述分析——海外在住経験を持つ日本人サッカー選手へのインタビュー調査から」南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編 第18号, pp. 83-114.
- カイ・サワベ (2014) 「『サッカーに言葉はいらない』は本当か 外国でプレーする日本人選手に言葉はここまで必要か」『サッカー批評』67, pp. 88-95.
- Kellermann - Koonen - van der Haagen (2006) "Feet Speak Louder Than the Tongue: A Preliminary Analysis of Language Provisions for Foreign Professional Footballers in the Netherlands", in Michael Long (ed.), *Second Language Needs Analysis*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 200-222.
- 小宮良之 (2005) 『大久保嘉人の挑戦——Desafio』角川書店。
- Lavric, Eva, Steiner, Jasmin (2017) "Personal Assistants, Community Interpreting and Other Communication Strategies in Multilingual Football Teams", *The discourse of sport : analyses from social linguistics*, edited by David Caldwell et al.
- Lavric, Eva (2020) "The football player's feet and tongue: could it be that they both count?", in Siebetchu, Raymond, *Sociolinguistic Dynamics and Language Teaching in Sports* (Studi e Ricerche), Siena: Edizioni Università per Stranieri di Siena, S. pp. 39-59.
- Lorca Antón (2015) "Interpretación deportiva; Estudio sobre el mercado laboral en España", Trabajo de Fin de Grado en La Universidad de Alicante.
- Maderer, Daniel et al. (2014) "Professional football squads as multicultural teams: Cultural diversity, intercultural experience, and team performance" in *International Journal of Cross Cultural Management* 14(2), pp. 215-238.
- Sandrelli, Annalisa (2015) "And maybe you can translate also what I say: interpreters in football press conferences", *The Interpreters Newsletter* n. 20, Trieste, EUT Edizioni Università di Trieste, pp. 87-105.
- Szymanski et al. (2021) "Multilingual and Multicultural Managers' Effects on Team Performance: Insights from Professional Football Teams" *Multinational Business Review*. Vol. 30 No. 1, pp. 40-61.
- Tenzer, Helene et al. (2021) "The impact of language barriers on knowledge processing in multinational teams" in *Journal of World Business* 56.

On Multilingualism in European Football Teams

— Focusing on the Japanese players in the Spanish Football League —

Yukio SHIMODA

Abstract

Football is a sport played in many countries around the world. Especially in Europe, top talents from all over the world gather in powerful football countries, where intra-team competition and fierce rivalry is at an extremely high level. Amongst this elite group of European players, there are many Japanese players with exceptional talent who are trying to make their mark. While more and more players are achieving respectable results, others are not reaching their full potential due to language and cultural barriers. Despite these problems, few studies have yet addressed in detail the language acquisition issues faced by Japanese players on foreign teams. In this paper, we focus specifically on the Spanish League and draw on findings from domestic and international media to identify the difficulties faced by some of Japan's most talented players in reaching their full potential and to explore ways to improve the situation.

Keywords: football, Japanese football players, language, foreign languages, Spain

